



Title	国木田独歩の創作態度と方法：基点としての「小民」〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	横田，肇
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12516号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65380
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hajime_Yokota_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 横 田 肇

学位論文題名

国木田独歩の創作態度と方法 ——基点としての「小民」——

本論文は、国木田独歩の諸作品を「小民」表象の追究を中心とし、「風景」論や比較文学の手法をも駆使して多面的に読解することを試み、独歩の日本近代における位置づけの更新を目指したものである。「小民」は、平民・庶民・貧民などと意味上の重なりを持つ言葉であり、特に独歩の『欺かざるの記』などに現れる「小民」とは、下層民であり、資産を持たない人々の謂である。本論文における「小民」は、病に苦しむ極貧の下層労働者、知的障害児、貧困層の女性など多様であるが、いずれも独歩特有のこれらの人々に対する眼差しの所産であることが論じられる。

序章は、国木田独歩と日本近代および日本近代文学との関わりを概観し、独歩の近代性を論ずるために、その作品における「小民」の表象に注目する方向性を明らかにしている。独歩は「小民」を描くにあたって抑制した描写で彼らに寄り添うように描いたが、その底流に島村抱月の唱える「真の自然主義」に共鳴し、人を善導するという文学者としての独歩の明確な使命感を読み取る。併せて用語としての「近代」についても検証を行っている。

第1章では独歩のデビュー作である「源叔父」について、独歩が大分・佐伯で目にした老翁（源叔父）と少年（紀州）のモデルを核として、父・子の想念においてワーズワース「マイケル」("Michael")のマイケルとリ्यूクの人物像を重ねて制作された作品として論じている。結末における源叔父と紀州との別離の背景に、独歩自身の父親との疎遠な関係を見て取り、それを「マイケル」受容の素地と見なす。その他、独歩と先妻・佐々城信子との離別や、佐伯における自らの生徒との離別体験などの投影も分析されている。

第2章は続いて発表された話題作「忘れえぬ人々」について、独歩における「風景」概念および描写のあり方の角度から論じている。その前提として、加藤典洋の論考「武蔵野の消滅」と、その批評対象である志賀重昂の『日本風景論』を検討し、日本の植民地化を回避するために日本の風景を称え保全を訴える志賀の立場と、それに対して独歩を近代における「ただの風景」の発見者と見なした加藤の立場を確認した上で、「忘れえぬ人々」の構造を分析する。作中人物・大津の旅行談において描かれる「風景」という内枠と、むしろ人々を明確に描こうとする独歩自身の語りという外枠との二重構造を読み取り、志賀・加藤のとらえた「風景」とは異なる、独歩の独自の文芸

的な要素を評価している。

第3章では独歩と画・画家との関係について考察されている。独歩の基本的な態度が示されたのは随想「画」とされる。独歩はここで絵画に対する自分の理解と見方が深化したことを表明し、それ以降、対象としての自然・風景・人々を凝視しつつ、画家ではなく作家としての道を進む。小説「郊外」では、市井の「小民」である当時の画家たちに対する共感が見られる。自伝的な小説「小春」では、ワーズワースの詩「ティンタン寺院」("Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey")を読み返すことから、独歩がそれまでに体験した自然と風景、特に佐伯におけるそれらとの接触が回想され、精神的危機からの回復と作家としての再出発の方向が読み取れるとする。

第4章では、島村抱月の自然主義文学観とワーズワース観に対する独歩の共感のあり方を解明し、その影響を小説「牛肉と馬鈴薯」および「空知川の岸边」において検証する。抱月はワーズワースを、ロマン派でありながら理想主義や主観主義にも、単なる写実主義にも堕さず、自然を主な対象として、両者の調和の取れた「真」をめざした文学者という意味で自然主義の先駆者と見なした。独歩自身は自然主義と規定されることを嫌悪していたが、この抱月のワーズワース観には共鳴していた。「牛肉と馬鈴薯」は、人間を理想と現実との狭間を揺れ動くものと見なし、その両者をともに生きる存在であることを肯定する作品であり、また「空知川の岸边」は、自然と自己との合致によって築き上げられた「風景の言葉」を描き出したものとされる。

第5章では、独歩が円熟期へと向かう過程に成立した作品として、小説「富岡先生」を論じている。頑迷固陋な地元の学者・富岡先生に対して、その息女・梅子と結婚するに至る細川繁の人物像に、独歩が開いた時代との通路が看取されると分析する。細川は一種の「小民」として、不本意な境遇と学歴にコンプレックスをもち、富岡の悪態に耐えつつも、決して自暴自棄にならず、校長という職務を忠実にこなす。このような細川の人物像は、立身出世でも挫折でもない、第三の道の方向性が示されており、そこに同時代の青年一般に通じる価値観が示されているとされる。併せて、独歩の郷里・山口県に実在した富岡先生のモデル富永有隣から、独歩独自の人物像への造形の過程についても論じている。

第6章では、独歩作品においてひととき異彩を放つ「小民」として印象深い、文中の言葉で「白痴」の少年・六蔵を登場させた小説「春の鳥」の精緻な分析が展開される。独歩は、大分・佐伯滞在中に知り合った山中泰雄をモデルとして、深い関心を寄せていた「遺伝」と「教育」の要素を加味して六蔵を作り出した。この造形には、西欧科学の言説と宿命的な「血の問題」、ひいては近代と反近代とが重ね合わせられている。さらにワーズワースの「少年がいた」("There Was a Boy")の少年のもつ無垢と自然児としての側面、それに「光明」を伴った少年の早世というモチーフ、また同じくワーズワースの「白痴の少年」("The Idiot Boy")における母親の愛情の要素も取り入れられ、こうして六蔵は重層的な意味を担う人物として、独歩における代表的な「小民」像として成立したと見なされる。

第7章では、独歩晩年の小説「窮死」ならびに「竹の木戸」を取り上げ、各々の主

人公である文公とお源を典型的な「小民」と認め、彼らが死へと至るまでの過程を分析する。文公もお源も「貧民」に属し、決して恵まれた境遇ではないが、周囲の人々の助けによって露命を繋いでいた。特に「竹の木戸」のお源は、隣家の好意と夫・磯吉による精神的な支えがあったが、皮肉にもそれが彼女を自死に追いやる原因となる。しかし、文公もお源も、死へと追いやられる決定的な原因は貧困や状況ではない。問題の核心は彼らの内面に潜んでおり、ついにそれを窺い知ることはできないが、内面の葛藤と懊悩の内実が各々の結末の空白の一行に込められているものと読み解く。

終章では、全体の論旨を要約し、さらに独歩の問い掛けが後代の文学者たちにどのように引き継がれたかについて、特に葛西善蔵の「椎の若葉」と本庄陸男の「白い壁」において考察している。独歩の描いた「小民」たちはいずれも日本近代の相克と桎梏の中に存在していたが、独歩は彼等の生態とともにその内面にも目を向け、その作品はいずれも重厚で多様な問いかけを担うものとなった。葛西の「椎の若葉」は、内面への真摯な問い掛けにおいて独歩と重なり、本庄の「白い壁」は、知的障害児の教育にあたる教師を通しての「小民」への温かな眼差しという点で独歩と重なる部分があることが論じられている。